

南山アーカイブズニュース

NANZAN Archives News

10号 2017年11月1日

目次

初めてのアーカイブズの思い出	オズワルド・カバラル	2
聖園女学院附属聖園幼稚園のあゆみ	平田 スエ子	3
聖園女学院附属聖園マリア幼稚園のあゆみ	櫻井 好枝	5
私とアーカイブズ		
アーカイブズを通じた出会い	吉田 早悠里	6
北海道大学文書館のとりくみ	木村 萌	8
世界を一周したジャポニズム	永井 英治	9



南山大学模型（南山アーカイブズ常設展示室）

復元制作

高橋 洋子 氏（元南山大学理工学部准教授）
貝沼 礼美 氏（名古屋聖霊短期大学卒業生）

巻頭言

初めてのアーカイブズの思い出

オズワルド・カバラル

館長に任命されて、ちょっと立ち止まって振り返って見た。最初に出会ったアーカイブズが脳裏に浮かび上がった。大学一年生で、夏休み中、故郷に戻って来て、義理の叔父の家に足を運んだ。彼は平日は市立中高等学校の職員として勤め、祝日と週末は自分の畑を耕すとともに故郷にある小教会の香屋係りをもやっていた。小話をする途中で彼は「手伝ってくれないか、次の日曜日のミサの準備をしなければならない」と言い出した。「はい」と私は答えた。「小教会は修繕された、見ても良い」とも言った。聖堂に入ると、驚いた。覚えていた限り、聖堂内の壁色は白かったが、しかしその白壁の下から11・12世紀のフレスコ画が現れた。香屋の準備をしながら彼に「何時からこの仕事をして来たか」と訪ねた。する彼は「子供の時から、その前は父、父の前はお爺さんがやっていた。司祭館に記録があるが、^{フランス}羅語で記されたから読めない。お前は読めるはずだ」と言った。

次の日、司祭館に行って主任司祭から入館の許可を容易に得た。アーカイブズは一つの部屋だった。薄暗い所で、真ん中に机とガタガタした椅子があり、床から天井まで棚、各棚は殆ど一杯だった。調べて見ると16世紀末から現在に到るまでの教会の洗礼式、堅信式、結婚式、死者書、会計簿等の記録が並んでいた。好奇心が湧いて自分の洗礼式を記録を探して見ると、その記録が出て来た。記入書式は羅語で印刷され、空白に手書きで誕生日、両親名、二人の代父名・司祭名等が書かれた。授けられた洗礼名を見ると三名があった、二番目と三番目は一回も使用しなかった。恥ずかしくなってその記録を元のところに戻した。

その部屋を見回ると、目立ったのは片隅にあったガラスの棚だった。開けて見ると、皮羊紙で包まれた幾つかの写本があった、各写本の背に小教会名(その聖堂の保護聖

人)があった、義理の叔父のを探した。運が良く、その聖堂の記録があった。分厚い写本の紐を解くと塵が舞った。カバーの裏には三つの皮羊紙が挟まれていた：二つは土地の寄付証明書で、残りの一つは神父の遺言書。最初の頁には記録者の名前と記録目的が書かれていた。1530年以前の記録は火事で損失していた。頁をめくると、紙の真っ白さで驚いた、和紙のような、布のファイバーが目立ち、インクは茶色。最初の記録者は恐らく公証人であった。あの時はまだ解読出来なかった省略と記号が多かったので、読むスピードは遅かった。それにも関わらず、項目を一つずつ読んで見ると目の前に別世界が広がって来た。世界史で覚える大事な出来事は一つも記されていない。その代わりに死者ミサを依頼していた人の名前と寄付した金額が残された。頻りに土地の寄付もあった。一般寄付は季節によって変更した。秋・冬になると豚肉とソーセージが目立っている。卵と鶏は平年中、葡萄酒も。故郷はやや北の方で、寄付の中にはビールも見える。教皇、皇帝、村の主任司祭と助人司祭の名前は稀に現れる。部落の生活が乱れたのは火事、大雪とペストの流行。その年の夏休みが終わるまで、殆ど毎日アーカイブズに通っていた。少しずつその分厚い写本の頁を全部めくった(残念ながらノートを取らなかった)。中高等学校、大学で学ぶ歴史と異なる別の歴史と出会った。それがどういう歴史であったか、あの時は理解していなかった。 Carlo Ginzburg の『Il formaggio e i vermi』(カルロ・ギンズブルグ(杉山光信訳)『チーズとうじ虫：16世紀の一粉挽屋の世界像』みすず書房、2012年)の様なマイクロヒストリーはまだ出版されていなかった。

(南山アーカイブズ館長/南山大学人文学部キリスト教学科教授)

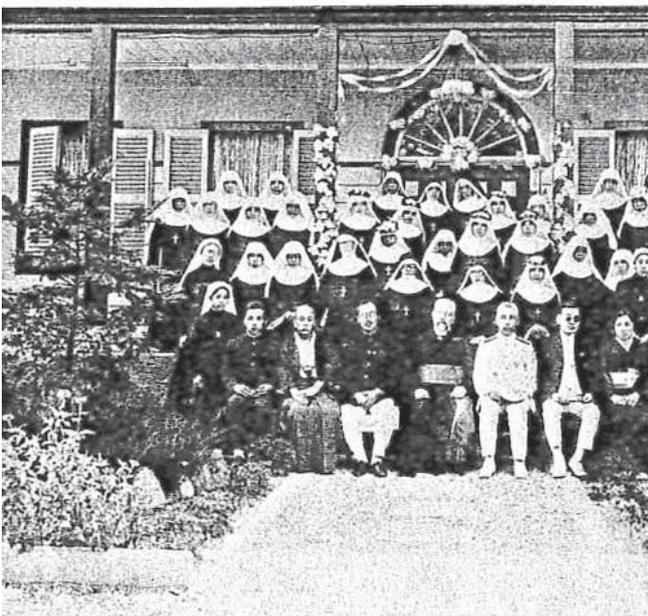
聖園女学院附属聖園幼稚園のあゆみ

平田 スエ子

本園は、聖心愛子会（現・聖心の布教姉妹会）によって1942年に創立され、75年の歴史をもつ伝統ある幼稚園として愛され親しまれている。創立当時は太平洋戦争の激化により女子の勤労動員が強化され保育施設の設立の増加が図られ、1943年「戦時託児所」として開設している。1945年8月戦争終結と同時に「聖園愛子園」と改称した。これが聖園幼稚園の前身である。本園の設立母体である聖心の布教姉妹会は、南山学園の創立者であるヨゼフ・ライネルス師により聖心愛子会の名称で秋田に創立され、1938年秋田から藤沢に本部を移転した。1975年、聖心の布教姉妹会と改名し今日に至っている。

1945年頃、会は自らも貧しくありながら、戦後の荒廃した社会にいち早く手を延べ全会員が一丸となって戦後の復興に大いに尽くした。

1947年の「雛祭りの写真」を見ると、子ども達の整然とした明るい勇気に満ちた頼もしさを感じられる。さら



初期の誓願式 中央 ヨゼフ・ライネルス神父

(2) 保育事業
幼稚園と託児所との長所をとつた所謂キング・ホルツ式の保育所で其の身心の健全なる発達、善良な性情を涵養し、家庭教育を補助併せて家庭内の労働能率増進に益するために行ふ。
本園の特長とするところは宗教的なる情操教育と生活訓練に依る良習慣を養ひ、自然界との接觸等により生活それ自體より流れ出る興味の中に幼児をして社會生活への順應性を培ふにある。
秋田、新潟、米子の如き雪多き地方、名古屋、岡山、津和野、四國等峻い地方、藤澤、小田原の如く氣候溫和な地方等夫々風俗習慣に應じて保育法も幾分異なるが特に農村の保育所に於ては、徒らな都會の模倣を排し郷土的な親しみと大自然の中に恩物を求め、遊戯を求め、教訓を求めて農村常設託児所の指針となるやう努めてゐる。
保育料は一月一圓或は一圓五十錢と定めるが家庭の事情に依り減額若くは全免する。保育項目は遊戯、唱歌、談話、手技、觀察、樂方等で、幼少組には自由時間を多く與へる特に本園に於ては、家庭の便宜と、通園途上の弊害を避ける爲、朝夕各方面に分擔して園児を送迎する。

初期の保育事業

に「象さんの滑り台」で、満面の笑みを浮かべ手を振る子ども達の表情は「素晴らしい！」の一言に尽きる。

1962年頃、日本は高度成長期の中、生活にもゆとりが見えてくる。これまでの2年保育から3年保育が導入され、園児数は増える一方であった。加えて保育内容も充実し、保護者からの信頼を受けている。また独自のリーフレット『よい子の友』を発刊し、心の教育に力を入れた。この頃になると園児が増え

聖園幼稚園では収容しきれなくなり、1966年に新たに善行地区に聖園マリア幼稚園を開設した。しかし1983年頃より出生率が低下し、少子化に向かった。1990年、聖園幼稚園の園舎の老朽化が進み全面改築することになった。1991年、園舎が完成し、建築中仮園舎で過ごした220名の園児が新園舎に移り卒園式をそこで行う喜びの日を迎えた。



2011年、学校法人『聖心の布教姉妹会』を『聖園学院』へ名称変更した。この頃から社会は大きく一変し、幼稚園・保育園の一元化が計画され新システムこども園への移行が進んだ。

2015年4月、聖園女学院附属聖園幼稚園と園名を変更、2016年4月、聖園学院と南山学園とが法人合併した。

こうして75年の時を経て聖園で生まれた 8027

名の卒園生はイエスの聖心に結ばれた人々の集う「みそのっ子家族」として今日の園を助け、支え、守る大きな力となっている。

さらに神のご計画による南山学園との合併は、神の神秘に包まれた大きな祝福の恵みであることを感謝してい



ひな祭り 1947年

ます。これからの学園の歩みが一層神のみ言葉（神言）の証しの場となるよう祈ります。

（聖園女学院附属聖園幼稚園長）



象さんの滑り台を囲む園児たち 1950年

聖園女学院附属聖園マリア幼稚園のあゆみ

櫻井 好枝

聖園マリア幼稚園の歴史は藤沢市にある聖園幼稚園の姉妹園として、1966年に創立されたことに始まります。これは、聖心の布教姉妹会を母体として、全国的にあった聖園関係の幼稚園としては比較的新しい歴史の歩みの中にあります。この年は第二次ベビーブームの5年前ですが、園児数が増加し、近隣の子どもたちが幼稚園に入園できない状況が生じ、就学前の幼児教育推進と宗教教育の充実を図ることを目的として聖園マリア幼稚園が創立されました。



コンクリート打ち放しの園舎 1966年

園児数は定員280名に対し、6年目には403人とこれまでの最高数を記録し、その後、1985年頃からは200～250名で推移してきました。1992年には年少組が誕生し、1998年には年少組が3クラスになりました。

創立後、半世紀を経て、園舎を改築することになり、建築中の2011年に3.11の地震を経験しましたが、無事に新園舎が落成しました。これは曲線を描く船型をした建物でホールは天窓が中央にあり、保育室は南側に位置する明るく、楽しい園舎で、保育活動の中で異年齢の子ども同士が温かい関わりをさらに発揮できる空間となっています。

なお、聖園マリア幼稚園の所属する学校法人は、2011年に学校法人神奈川聖心の布教姉妹会から学校法人聖園学院と名称を変更し、聖園マリア幼稚園は2015年に学校

法人聖園学院 聖園女学院附属聖園マリア幼稚園となりました。さらに2016年には、学校法人聖園学院は学校法人南山学園と合併し、学校法人南山学園聖園女学院附属聖園マリア幼稚園と改称し、現在に至っています。

この合併により、南山学園の創立者であり、また、聖園マリア幼稚園の母体である聖心の布教姉妹会の創立者ヨゼフ・ライネルス師のもとに、同会創立から約100年を経て、再び統合されたことは偶然ではなく、摂理であると確信します。

本園のモットーである「イエスの聖心を伝える教育」は南山学園のモットーである「人間の尊厳のために」を踏まえ、幼児教育分野では「神様はいつも見てくださる」と平易な言葉で園児たちの心に浸み込ませていきたいと思っております。

家庭と子どもと教師のつながり、側面からの見守りを大切にし、子どもたちが温かな楽しい雰囲気の中で神にも人にも愛されていることを実感できるよう導いていきます。

(聖園女学院附属聖園マリア幼稚園長)



2011年改築後の船形園舎

アーカイブズを通じた出会い

吉田 早悠里

私は2004年から、エチオピア南西部カファ地方で文化人類学の立場から現地調査を行っている。カファ地方は、エチオピアの首都アディスアベバから南西約450kmの距離に位置する。そこには約90万人が暮らし、その大半はオモ系カファ語を話すカファと呼ばれる農耕民である。カファ地方には、18世紀にはエチオピア高地において最も強大な力を持つ王国とされたカファ王国が繁栄していた。しかし1897年、カファ王国はエチオピア北部に位置したエチオピア帝国に征服され、崩壊した。

日本に暮らす多くの人々にとって、カファ地方はなじみのない地域だろう。だが、カファ地方が「コーヒー発祥の地」とされ、コーヒーの名称もカファ地方に由来するという説があることを知れば、親近感を抱く人もいるのではないだろうか。私がカファ地方を調査地として選んだ理由も、まさしくカファ地方が「コーヒー発祥の地」とされるからであった。

私が調査地をカファ地方に決めた後、石原美奈子先生（南山大学人文学部）が故福井勝義先生（京都大学）に私の研究テーマについて相談してくださった。すると、福井先生は、「カファ地方であれば、マンジヨ（同地に暮らすマイノリティ）でしょう」とおっしゃって、一冊の本のコピーを貸してくださったという。それは、オーストリア人でカファ研究の第一人者フリードリッヒ・ユリウス・ビーバー（以下、FJ.ビーバー）によるドイツ語の著作『カファ』（1920-1923年出版）であった。石原先生は、そのコピーをさらにコピーして私に手渡してくださった。当時、私はドイツ語ができず、加えてマンジヨに関する記述がほとんどなかったこともあって、そのコピーは程なくして本棚に飾られるだけになった。

福井先生の一言で、私はマンジヨと呼ばれる人々を研

究対象とすることになった。マンジヨはかつて狩猟を主な生業とする狩猟集団とされ、共住するマジョリティの農耕民カファから日常生活のさまざまな側面において差異化され、周縁化されてきた。私が研究を始めた頃には、マンジヨは狩猟をやめて農耕を行い、カファとほぼ同じ生活を営むようになっていた。だが、カファとマンジヨの関係は差別―被差別の関係にあるとみなされて、政府やNGOなどによって関係改善に向けたさまざまな取り組みが行われていた。なぜマンジヨはカファから周縁化され、差別されているのか。カファとマンジヨの関係に関心を抱いた私は、カファとマンジヨの関係が差別として歴史的にどのように形成され、変化してきたのかについて明らかにするべく、2005年1月からほぼ毎年、現地調査のためにカファ地方に通った。こうして、現地調査で得たデータをもとにして、2012年に博士論文をまとめた。

しかし、博士論文執筆時からひとつの大きな問題に直面していた。それは、カファとマンジヨの関係の変化を歴史的に解明しようと試みても、カファ地方の歴史に関する資料がほとんどないということであった。従来、エチオピアにおける歴史研究は、文字資料が残されているエチオピア北部およびエチオピア帝国の歴史の解明に集中し、19世紀後半にエチオピア帝国に征服・編入された南西部の歴史研究は著しく立ち遅れてきた。また、カファ地方で話されている現地語のカファ語には文字がなく、文字資料がなかった。さらに、口頭伝承やかつての歴史を知る年長者の多くが既に他界しており、20世紀初頭までのカファ社会の様相を現地調査によって解明することは、ほぼ不可能になっている。そのため、カファ地方の歴史解明という課題に対して、私は頭を抱えていた。

2014年春、私はエチオピア西部で調査を行うドイツ人

の文化人類学者と E メールでやり取りをしていた。その時、私たちのメールの内容は、19 世紀から 20 世紀初頭にエチオピアを訪問したヨーロッパの旅行家や宣教師らの話題になった。カファ地方の歴史解明について頭を悩ませていた私は、過去にカファ地方を訪れ、同地について記述を残した人物の日記や未刊行物はないのだろうか、とドイツ人の文化人類学者に尋ねた。すると、カファ研究の第一人者である F.J.ビーバーの孫がウィーンに暮らしており、F.J.ビーバーが遺した資料群も現存しているという。私は、すぐさま F.J.ビーバーが遺した資料を展示しているというウィーンの地区博物館に E メールを送った。それから数日後、私は F.J.ビーバーの孫クラウスからの返信を受け取った。F.J.ビーバーの子孫と直接連絡を取ることができたということに、私は感動し、舞い上がった。

F.J.ビーバーの孫クラウスとの Eメールのやりとりが 1 ヵ月くらい続いた頃、私はオーストリアを訪問することを決めた。当時、クラウスは 74 歳で、彼は F.J.ビーバーの存命する唯一の子孫であった。ご高齢であることもあって、この期を逃すわけにはいかないと考えた。この目で、F.J.ビーバーが実在していたのだと確かめたい。そんな想いに駆り立てられた。

2014 年 9 月、私はウィーンでクラウスと面会し、F.J.ビーバーが遺した資料群を閲覧させて頂いた。F.J.ビーバーが 1904 年、1905 年、1909 年にエチオピアで収集した民族資料、エチオピアで撮影した写真のほか、未公開の草稿、日記、書簡、家族に宛てた絵葉書、家族・親族らのプライベート資料が遺されていた。カファ地方の民族資料には、もはやカファ地方には現存していない、当時の衣服や盾、槍をはじめとしたものが含まれていた。また、文書資料のなかには、F.J.ビーバーが文字をもたないカファ語に独自にローマ字をあてて表記した文書も含まれていた。加えて F.J.ビーバーに関する記録や新聞記事の切り抜きも、整理、保管されていた。これらは、F.J.ビーバーの息子とその妻によって整理され、現在に受け継がれてきたのである。

2014 年のウィーン訪問から現在まで、私は F.J.ビーバーの資料群を整理、デジタル化し、アーカイヴズとして活用、運用していくための基盤整備を行っている。資料整理を行っている、ついつい写真や絵葉書に見入ってしま

う。F.J.ビーバーの大胆で、癖のある髭文字（当時のドイツ語圏で用いられた筆記体の一種）は、彼の人柄を想わせる。独身の時に後に妻になる女性に送った絵葉書、結婚後に 2 人で撮影した写真、そして 2 人の息子と家族 4 人で撮影した写真。妻に宛てた絵葉書には常に「(あなたに)キスを！」と書かれ、時にユーモアに溢れたメッセージがしたためられている。こうした資料群は、研究成果物としての書籍や論文からは知ることのできない、F.J.ビーバーの人柄、彼の日常生活や人生を伝えてくれる。

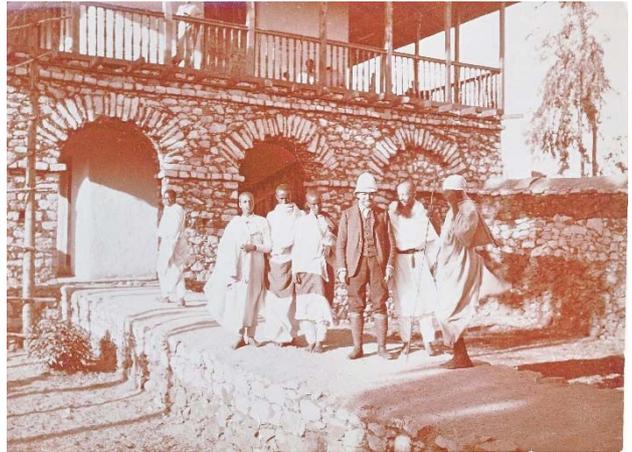


写真 アディスアベバでの F.J.ビーバー（中央）・1905 年撮影
（提供：クラウス・ビーバー）

私が専門とする文化人類学は、現地調査に重きを置いていることもあって、私は調査地で多くの人々と出会い、彼らがどのように生きたのか、彼らの人生に触れる機会に恵まれている。アーカイヴズも同様であろう。アーカイヴズに触れることは、その時代を生きた人々の人生に触れることである。アーカイヴズを通して、F.J.ビーバーは私にとって単なるカファ研究者の 1 人ではなくなった。F.J.ビーバーの子孫と接していることもあって、F.J.ビーバーはその存在を身近に感じる事が出来る、私の親しい大切な存在へと変わった。

ところで、2004 年にカファ研究を始めて以来、私の本棚にはカファ地方に関する文献が増え続けている。そこには、私が最初に手にした F.J.ビーバーの『カファ』の複製版も並んでいる。だが、最初に手にした『カファ』のコピーを手放す気分にはなれない。なぜならば、そのコピーこそ、私と F.J.ビーバーの最初の出会いであり、私とアーカイヴズの始まりだからである。

（南山大学国際教養学部国際教養学科准教授）

北海道大学文書館のとりくみ

木村 萌

細々と続けていた北海道大学大学院生活の中で、筆者は北海道大学文書館の技術補助員（短時間勤務職員）として 2009 年から 2011 年まで勤務した経験がある。本稿では、自身の経験にもとづいた北海道大学文書館の紹介とその体験を述べる。

北海道大学文書館（以下、文書館）は 2005 年に設置され、北海道大学に関する歴史的な資料を収集し、整理し目録を作成し、保管する機関である。北海道大学では、すでに 1982 年には北大百年史が編纂・発行されるなど、組織的に大学沿革史料の積極的な保存を行ってきたことがうかがえる。

技術補助員の主な業務は、寄贈していただいた資料の目録作成と調査研究補助であった。筆者は近世文学を専攻していたのだが、近現代史料の資料調査は近世史料のそれとは異なる。たとえば、刊行物であれば大量の重複本をどのように登録するか悩み、古びた大学の文書（と思しきもの）であれば錆のでたクリップやホチキスの取りはずしに苦心し、何枚もある農場の動物の写真がどの順序で撮影されたのか見当もつかない。また、研究者らの学生時代の手記の解読についても、いくらかくずし字が読めるとはいえ、近代の研究者たちの特徴的な書体には閉口する部分もあり、近世の版本とのちがいをまざまざと覚えることがあった。

ただこれら研究者の手記は、あくまで日常のできごとにはすぎないことであっても、日々あったことを緻密に書き連ねており、留学中の様子や、学生生活の様子まで事細かに描写されている。こういった姿勢は調査対象にも向けられ、細やかなデータ収集や分析が彼らの偉大な研究業績へとつながったのであろう。

また、筆者が勤務していたころ、大学図書館内の 1 階

ロビーで展示を行っていたのだが、門外漢の筆者にとっては一見ありふれた大学文書が、北海道大学の沿革史や著名な研究活動紹介の一部として形を成してゆくのは、非常に興味深いものであった。

文書館の展示テーマはさまざまで、単に著名な研究者を対象とするだけではなく、旧制の大学生生活の様子をとりあげたり、帝大に入学した女性についてなど豊かなテーマ設定で展示を行ってきている。また頻繁に展示替えもされ、調査研究に対する意欲的な姿勢がわかるものとなっている。

文書館に勤務する以前、文書館というと、文書整理の知識をもとにした大学文書の整理保存や展示の業務がほとんどだと思っていた。ところが、こと札幌農学校を発端とした北海道大学においては幾多の理系の研究者の研究業績を扱うために、農学・理学、キリスト教、ドイツ語や近代くずし字の解読などの幅広い知識や技術をもって、その実態をあきらかにしている。さらに文書館では、過去在籍していらした方のご家族との関係性を大切に、時候の挨拶や、実際に資料調査のかたわら本州や海外に行かれることも多く、未見史料を求めて意欲的な活動を継続的に行っているのがうかがえた。

あくまで傍らで眺めるにすぎない立場であったが、北海道大学文書館を通じて大学アーカイブズを理解しようとするれば、大学アーカイブズは大学文書の散逸を防ぎ、整理保管に努めることを主体として活動する場である。しかし同時に、大学文書を対象にした研究については様々な切り取り方が可能であり、教育史のみならず多方面において幅広い可能性を秘めているのではあるまいか。

（元南山大学派遣職員）

世界を一周したジャポニズム

永井 英治

印象派に代表される欧米の画家が木版多色刷の浮世絵を介して、日本の風土と「芸術」に強い関心を持った一通例、ジャポニズムはこのように理解されている。当の日本では、近代に入ると浮世絵は全体として廃れていったが、20世紀の欧米ではジャポニズムがまだ生きていた。

レーモンド夫人となるノエミ・ペルメサンはフランスに生まれ、大西洋を渡ってアメリカに移り住んでいた。彼女はアメリカでのジャポニズムの最後の担い手の世代とされるアーサー・ウェスリー・ダウ（コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジに在籍。画家であり、版画家でもあった。彼はフェノロサにも影響を受けている¹⁾）に美術を学んでいた。レーモンドがフランクロイド・ライトとともに帝国ホテルの設計のため来日すると、ノエミも一緒に来日し、帝国ホテル設計の仕事に従事した。「孔雀の間」と呼ばれる大広間のインテリアデザインはノエミの原画によるものとして知られている。

ライトは帝国ホテル完成を待たず帰国したが、レーモンドは最後まで見届け、その後、自分自身の建築設計会社を設立した。帝国ホテルは関東大震災に耐えたことで、建築界での評価を獲得したが、レーモンド自身は、ライトの下で図面を書きながら、ライトの手法への違和感を募らせていき、独立してからも、ライトからの影響を脱することを課題として自覚していた。

レーモンドの建築にはペレヤル＝コルビジュジェの方法が取り入れられ、インテリアではノエミの協力があつたと考えられている。ル＝コルビジュジェがそうであったように、時としてすぐれた建築家は同時に優れた画家でもあつた。レーモンドもまた、美術に関心を持ち続けた²⁾。ちなみに日本の建築学の祖というべきジョサイア・コンドルは川鍋暁斎に絵を学んでいる。

明治の終わりころ、木版多色摺が廃れようとしていた

日本の版画界には、二つの方向が生まれていった。ひとつは、版元があつて、画家が原画を書き、彫師が版木を作り、摺師が日本独特のバレンを用いて摺るという分業体制を維持し、それぞれの技術伝承者を育成する新版画と、画家自身が自刻自摺で作品を作る、いわば「芸術」を意識した手法である。前者は、江戸時代の浮世絵に代わる、外国人向けの日本土産（スーベニール版画とまで揶揄された）ないしジャポニズムを再燃させるかのように欧米への売り込みに成功し、評価された木版多色摺版画であり、版の数も多色摺の色数も浮世絵とは比べ物にならないほど多判多摺を実現した。そして分業とは言え、作品の完成まで画家は監修し、なかには実際は摺師の仕事であっても自摺と称するまで作品の仕上がりに自覚を持つ者も現れた。このような新版画の版元、いわばプロデューサーとして渡辺庄三郎の名を第一に挙げてよいであろう。

渡辺を中心とする新版画のグループには外国人も参加した。ノエミはその一人であつた。ノエミは1920年に「桜田門」と題する作品を制作し、翌年、この作品を渡辺主催の展覧会で公開する（現所在は不明とされる³⁾）。これ以外の僅かな版画を見ると、日本人の作品の中においてもまったく違和感がなく、その上で、色彩は突き抜けたイメージを与える。版と摺りの数の違いであつたと推定され、**simple**な色遣いと評価されよう。

レーモンドの建築五原則のひとつ **natural** は、南山大学の歴史では自然保護にまで拡大解釈されているが、建築そのものに即して言えば、地形の改変を最小限にとどめたというのが実際である。しかし、レーモンド設計事務所では、ノエミの前では蚊を叩くことまで自重され、レーモンドもノエミの前では蚊に刺されるのを我慢したと伝えられる。求道者のようなノエミの自然観に、レーモンドは影響を受けていたと考えてよいであろう。それは、柱や

梁や棟が表面にむき出しになった日本の伝統的建築から、構造がそのままデザインとなる建築手法を学び取ったことの背景に読み取るべきことと思われる（レーモンドがサンドペーパーを嫌ったのは、Artificialな手法を避ける意識の顕れであろう）。

ノエミが参加した新版画運動は、通俗的ジャポニズムへの批判に対峙しなければならなかったが、それらへの反批判となる新版画への評価には、コレクターのロバート・ミューラーの存在やごく最近のステイブ・ジョブズによる収集など、日本の伝統文化の外部からの評価に影響されてきたと言わざるを得ない。異文化圏からの評価に弱い日本人像の露呈である。

ノエミによって大西洋・太平洋を渡って、世界を一周してきたジャポニズムの最後の最後に位置付けられる可能性を持つレーモンド建築に対しては、それが一方でモダニズム建築という世界的動向の中にありながら、もう一方では日本で育まれた建築手法であることを評価するのは、今度こそ日本の文化圏に生きてきた者の課題ではないかと思うのである。と同時に、ノエミの芸術も「工芸」という枠にとどめるのではなく、芸術活動全体へ再評価が必要となろう。内助の功などと言ってすまされない意義を持っているのである。

(南山アーカイブズ/南山大学国際教養学部国際教養学科教授)

- 1) WIKI. Arthur Wesley Dow. <https://en.wikipedia.org>. 2017年9月3日閲覧。
- 2) レーモンドは陶芸にも関心を持ち、濱田庄司から益子の土を分けてもらっていたが、技術的にはアマチュアの域にとどまった（北澤興一氏談）。
- 3) 小山周子「大正新版画の研究—版元を中心とした美術の成立、構造と展開」総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本文化専攻博士論文、2013年。

展示室のご案内

南山学園の歩みを概観していただける常設展示室と南山学園の歴史について様々な視点からの展示を行う企画展示室があります。

～～現在開催中の企画展～～

テーマ：五軒家町キャンパスの構想
開催期間：2017年10月2日～2018年7月31日
開館時間：月～金（土・日・祝・事務休業日を除く）
10:00～16:00

入場無料、予約不要でどなたでもご見学いただけます。
展示クイズ・スタンプラリーコーナーもあります。参加者には記念品の配付も行っておりますので是非参加ください。
皆様のご来館をお待ちしております。

史資料寄贈のお願い

当館では、南山学園に関する以下のような史資料を広く収集しています。

- モノ：校章・バッジ・体操服・制服など。
- 文書：教科書・教材・時間割など。
- 写真：授業・学生生活・サークル活動など。

在学・在職時にはありふれていたものが、学園史を知るための貴重な史資料となることは少なくありません。まずは南山アーカイブズまでお問い合わせください。

< 連絡先 >

TEL052-861-0613/FAX-052-861-0614
E-mail: nanzan-archives@nanzan.ac.jp